



ぼくは、そこを黙って過ぎ、どんどん村の避難小屋をめざしました。日はやや西に傾いていたけど、ぼくの目の前に大木の松がありました。その近くに幸い避難小屋があったので容赦なくそっちへ向かいました。

すると松の下に避難小屋の主人と、もうひとりの男の人が腰かけて空を見つめていました。

「こんにちは、あのぼく吉村貞雄といいます。お腹がすいて、兵舎を抜け出してきました。何か下さいませんか」

とその姿は、戦闘帽に黒ブチの丸いメガネをかけ、ヨレヨレのズボンに巻脚絆まききゃはんの、やせこけた若い人でした。

「あ、それは大変だったね。して、あんたはどこからきたのかな」

「はい、ぼくは京都出身です」

「そして、おいくつですか」

「はい、十八歳です」

「いや、十八歳で兵隊さんになり出されたのか、さあ、きょうはこの小屋で夕食をとり泊まっていきなさい。ゆっくりして話でもしたらいいですからね」

この家の主人は学校の先生でした。先生の弟は日中戦争で脚に弾が入ったまま生きていました。主人は話しやすく、とてもほっとしました。すると小屋の後ろから奥さんらしい女の人が出てきて、

「あら、あなたは兵隊さんなの、若いですね。遠い所から

ここ小さい久米島まで来られたのかね。ほんとうにごくろうさまね」

「どうかお世話になります」

「でも安心しなさい。きょうは豚汁をつくってあげますから。いっぱい食べてね。ゆっくりここで休んでから、明日お帰りなさい」

と行って、ゆっくり休んで帰りました。

この先生の家族はやさしかったよ。戦闘の町中から逃げて、山の中に家をつくって隠れて、大家族でくらしていました。先生に奥さん、子どもが七人、父、母におじ、おばさんとみんなやさしくしてくれました。

翌朝、ぼくはお礼をいって持ちあわせていたタオル三枚をさしあげました。でもね、ももかちゃん、それから兵舎へ向かったよ。村で物乞ものこいしたといつて隊に銃殺されましたよ。

何十年も経てから、厚生省から私たちの骨を拾い軍用機で運ばれて、やっと日本へ帰りましたよ。この島で私だけじゃない、多くの兵隊が死んでしまいました。

ももかは、吉村さんの語りを友だちにも話しました。ももかはあんな戦争はさせませんよと心に誓って、安らかにおねむりくださいと合掌しました。